
え．．．？被魔師って？？

ゆずぽん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

え・・・？被魔師って？？

【Nコード】

N8098W

【作者名】

ゆずぽん

【あらすじ】

相良ユズは、15年前青エクスの最新刊を買った帰り不思議な声と光に包まれた。気が付くと真っ白な部屋に顔だけはいい神様がいた！神がいうには光の正体はイノセンス？！しかもクラウン・クラウン？！！アレン・ウォーカーとなってDグレの世界に……。そして今青エクスの世界にアレンとして行く事に　　！？

プロローグ（前書き）

ようこそ！来てくださりとても嬉しいです。

この作品は青の被魔師を中心にした二次創作作品となります

その為原作のネタバレとなる部分もあります

そのことをご了承の上、先にお進みください

プロローグ

初めまして！元女子高生の相良ユズです。今は転生してアレンと名乗ってます。

知ってる方も多いかと思います。ある物語の主人公になってます

W
W
W

えーっとですね・・・此処どこっスか？

汗）
こんな全て真っ白な部屋1つしか知らないんですけどぉ・・・（

《よぉ。久しぶりだな、ユズ。今はアレンだったか？会いたかったぞー。》

「やっぱりお前か クソ神！私は会いたくなかったよー！！」

《アレンのキャラ崩壊してるよ》（笑）《

はっ！しまった！！落ち着け自分。こんな奴相手にするな。

「・・・コホンッ。お久しぶりですね。それでどういった用件なんですか？」

《アレンの力にも慣れただろうし、そろそろ本命のあの世界へ行ってもらおうと思ってな。》

「はあ？」

《いや言ったよ？アレンになる前に言ったよ？？えっ、ちょっとその顔やめてくんない？馬鹿にするか憐れむかどちらかにしてええ！！！》

「じゃあちよつと15年前を思い出してみよー。」

《スルー?!まさかのスルー?!》「うるさいですよ。クラウンベル
トvv」むぐおおっ!~!《》

プロローグ（後書き）

はじめまして！ゆずぽんです

勢いに任せて書き出したお話です

しかも初めてなので、間違いなどもあると思いますが、
あたたかく見守っていただけると嬉しいです

頑張っていくのでよろしくお願いします

第一話 15年前、そして神との出会い（前書き）

読んでいただいた方にとっても感謝です

休みの間に出来るだけ投稿したいと思ってます

第一話 15年前、そして神との出会い

〱15年前〱

私相良ユズは、漫画と小説が好きでとくにDグレイマンと青の祓魔師が大好きだった。

それはきつと主人公が自分と似てるから、かもしれない。私の親はある事件に巻き込まれ、5歳の頃に亡くなった。

私は事件のせいでのトラウマや恐怖症関係が面倒だったのか、紅と灰色のオッドアイが気味悪かったのか、事件のショックで持ってしまった異様な力に恐怖したのか。

親戚にたらい回しにされ続けた。結果、今は仕送りをしてもらいバイトをしながらひとり暮らしをしている。

異様な力というのは一種の霊能力だ。視たり触ったりもできるのでちよつと手助けをしたりもする。それに何故かすごく好かれてしまつて「ユズ様!」「主様!」などと敬われる。手助けは大変な事も多いけど正直この力を持ち、皆が視えて触れられて話せるのがとても楽しくていつも救われてきた。

「ユズ様〱青エクの最新刊あつて良かったですね!」

ユズ「ほんとだよね。まさか学年主任に雑用頼まれるとは思わなかったよ。」

しかも職員会議で使う資料をホッチキスで止めるだけ！？自分でやれよ！……！

あつ今話してるのは土地神の名歌君！あだ名はメイちゃんv犬みたいですごく可愛いww

ユズ「でもまあ、新刊買えたから許してやろう！にやはははは」

おっと、シユラさんが移っちゃったゼイ

メイ「ユツユズ様！！青エクが光ってます！！！！汗」

ユズ「へ？うおおおおお！！何これええ！！」

《……わ……こえ……えよ。》

ユズ「誰？！」

《……れの……声に……。よ。》

メイ「ユズ様!!その光から声がつつ!!」

ユズ「メイちゃんも聞こえるの?！」

《我の声に答えよ。神に選ばれし異界の使徒よ……。》

ユズ「はい?? あっ!!!!」

なにっ意識が……もってかれ……るっつ

メイ「ユズ……さ……」

ユズ「……此処どこなの……」

? 《おはよー!》

Oh~!!金髪イケメンだ~。

? 《これ1巻ない?面白いんだけ 「なに人が読む前に読んで
んじゃボケい!!!!」ぐふおおおっ!!!!》

ユズのアップーが決まった！謎のイケメンは300のダメージを受けた！！

？《ゴホゴホッ詳しいアップーだねっ！流石だねユズ。》

ユズ「名前まで知ってるなんてストーカー？！イケメンがもつたいないぞ。」

？《ストーカーじゃないよ！！イケメンなのは認めるけど「そこは認めんのかよ。」俺は神様だよ。》

ユズ「精神科行けば？？」

自称神《そんな憐れんだ目で見るとやめてえええ！！って何？！この自称神って！自称じゃないよ！！本物の神様！！！！》

ユズ「うるさいんだよvv黒笑」

《ぎいやあああああ》

そして10分後

ユズ「それで、神様が私に何の用なの？私の青エクを光らせて声かけてきて。（イライラッ）」

神《それは俺じゃない。クラウン・クラウンだよ。》

ユズ「いつの間にかボロボロになった神様は真剣な目で言った（笑）」

神《声にでてるよ。》

ユズ「わざとだしてんの。」

神《泣いていい？俺もう泣いていい？？いいよね？！》

ユズ「・・・あれ？すごく聞いたことがあるんだけど。《スルー？スルーなの？！》もしかして・・・」

神《ぐすん・・・そう！君が好きなDグレイマンの主人公アレン・ウォーカーのイノセンスだ。イノセンスが異界にいる君を選んだんだ。》

ユズ「（うわ、持ち直したあ……。）ちょっと待ってよ！じゃあアレンはどうなるの？！」

神《ユズになるんだよ。（ニコッ）》

・
・
・
・
・
・
・
。

ユズ「はああああああ
　　？？！！！」

第一話 15年前、そして神との出会い（後書き）

もう少し15年前の話が続きます

なるべく早く青エウの世界にいきたいと思います！

第二話 少しの真実と新たな旅立ち（前書き）

15年前についてが長くなってしまいました
いよいよ旅立ちです

やつと青エグにはいれます・・・。

第二話 少しの真実と新たな旅立ち

ユズ「つまり私にアレン・ウォーカーとしてDグレイマンの世界に行けっということ?？」

神《うん。 あっ女の子のままだから安心して!》

ユズ「じゃあネアは?!私の中にいるの?？」

神《14番目のことだね。 実は14番目破壊のネアは アレン
の血の繋がった父親だったんだ。》

ユズ「うそ……。 じゃあアレンはネアからノアの力を受け継いで
しまったってこと?？」

神《そういうこと。 原作でアレンとネアが出会えたのは、アレンの
中にあるノアの力がネアを記憶していたからなんだ。 だから時々し
か会えないし、ネアには何の力もない。 つまり宿主ではないから自
分の意識も保てたり大切な人を殺さなくてもいいんだよ。》

ユズ「よかった……。」

神《さてそろそろ行こうか！！扉オープンww（＜＞）》

ユズ「顔文字とかすぐくうざっ！ってかドアの中からどこかで見たことある目と黒い手があ！！鋼錬じゃん！思いつきし鋼錬じゃん！！？」

神《頑張ってねユズ。アレンとしての役目が終わったら、居るべき世界へ返してあげる。「手につかまれた　！！！」の世界に、ねって最後まで遮るんだね（泣）》

ユズ「え？何の世界って？！！」

神《またここに来たらしいよ。》

ユズ「ふざけんなああ！！あ、メイちゃんは？！」

神《元の世界にいるよ。》

彼の居るべき世界にね……。まだ言わないけど（＾×＾）

ユズ「メイちゃんに会ったら言っというて！！　　いつてきますって。」

神《！クスッ分かった。》

ユズ「後今度会ったらあんたぶん殴るからw覚悟しといてねv黒笑」

神《ええ？！今いい感じで決まっただよ？！！》

最後に聞こえたのはあのクソ神のウザったいツッコミだった。

ユズ「言ってねえじゃん！！！」

神《ぶふおおお！！！》

ユズの右フックがきまった！神は400のダメージをくらった！

神《言ったよ！！遮ったのユズじゃ　「ああ？」ハイ、僕が言ッテマセンデシタ。申シ訳アリマセンデシタア！！！》

ユズ「はあ。（アレンモード）それで？私のいるべき世界って何処なんです？？」

神「切り替え早っ！ えっ とそこは君が生まれた本当の世界なんだ。」

ユズ「私が生まれた世界??」

神へそう。君は唯一悪魔に愛される存在だった。そのせいで悪魔たちの王にまで気に入られてしまった。俺は頼まれて君を安全な世界へ送った。せめて奴らに対抗出来る力を得るまで……。送った先の親は家の玄関に居た籠の中の君を、あの事件が起こるまで大切に育ててくれた。でもまさか神の結晶までもが君に惹かれるとは予想もしなかったけどね。》

ユズ「その世界って……青エケ?？」

神《そうだよ。そして君の本当の親は 藤本 獅郎だ。》

ユズ「え……ええええええ！！！！？？？はっ母親は？！」

神「淒い人だぞ？名前はフレア・ログフォート。聖母マリアの子孫で聖騎士の補佐官をしていた。聖母マリアは悪魔にも愛されていた

らしいから、ユズも受け継いだんだろうね。》

ユズ「・・・生きてるの??」

神《残念ながらユズを生んですぐに亡くなった。藤本は俺を特殊な魔法円で召喚し、君を託したんだ。》

ユズ「そっか・・・。獅ろ・・・父さんは原作のままいくと死んでしまっ・・・。」

神《変えるんでしょ??》

ユズ「当たり前!!」(ニツ)

父さんは死なせない。アマイモンも死なせたくないし・・・原作ブレイクするしかないっしょ!!!

神《よし!じゃあさっそく扉オープン(。。)》

ユズ「だから顔文字うざいつ!!ってまたこれ?!鋼錬パクっちゃつていいの?!真理怒らないの?!」

神《He is my best friend》

ユズ「まちでええ?!!あゝ 掴まないでー!!! 《またね、ユズ^^
《気持ちわる 「バタンッ

扉が閉まり部屋には静寂が戻る。

神《どうか今度こそ彼女に祝福を・・・。》

そしてアレン・ウォーカーとなったユズは青エクの世界へ旅立った。

第二話 少しの真実と新たな旅立ち（後書き）

ユズの親凄すぎ!!

次話はユズの紹介です

*** 主人公設定* (前書き)**

今回は主人公ユズの紹介です
そしていよいよメイちゃんも・・・?!

*** 主人公設定 ***

*** 転生前 ***

名前：相良 ユズ （さがら ゆず）

性別：女

年齢：16歳

顔：中性的だが可愛い系に入る。目は生まれつきオツ
ドアイ。右が灰色左が紅^{あか}

特殊能力：霊能力。昔から幽霊や妖怪や土地神などと
話したり、遊んだりしていた。また、力が強いらしく被うことも出
来た。

*** 転生後 ***

名前：アレン・ウォーカー

性別：女

年齢：0歳から生き、原作通り15歳で教団に入った
が神の所へ戻った頃はもうすぐ16歳になるところだった。

顔：原作通りの顔に少し可愛さを足した感じ。ゆずぽ
んとしては天使と呼べる可愛さww髪の毛は鎖骨あたりまで伸ばし
ている。

特殊能力：霊能力。

クラウン・クラウン 原作通り

ノア ユズではなく、アレン自身の親が1
4番目だった。なので、宿主ではなく遺伝として受け継いだため自
分で力を操れる。

ネアの場合「破壊のノア」だったが
アレンは「創造のノア」

創造のノア その場にあるものを思いのま
まに操ったり、作り直したりできる。錬金術のようだが、等価交換
は無視！量だつて数だつて増やせる。（例：一個の豆から ジャツ
クと豆の木 みたいな木を作れる笑）

* 青エク *

上のアレンの設定に次のことを足します。

ユズは青エクの世界の住人だった。

父は聖騎士である藤本 獅郎。母は元聖騎士の補佐官で聖母マリアの子孫フレア・ログフォート。フレアはユズを生んですぐ亡くなり、力が受け継がれたことを知った獅郎が神にユズを安全な世界へ送ることを頼んだ。

特殊能力：霊能力 実母から受け継いだ聖母マリアの力だった。一部の悪魔以外には愛される存在となる。被う力も強く詠唱の一部分やオリジナルで被うことが多い。

使い魔：名歌^{めいか}あだ名はメイちゃん。ユズとして生きていた世界で親友だった土地神。しかし実は上級悪魔の狼牙^{ろうが}。

使い魔2：アマイモン。あだ名は縮めてアモン、アモン君。どうやって使い魔になるかは本編を読み進めてください

*** 主人公設定* (後書き)**

設定はご理解いただけたでしょうか？
分かりにくい設定で申し訳ありません
次話からユズをアレンと書きます！！

第三話 初めまして異世界（前書き）

学校があると帰りが遅くなるので投稿が遅れてしまいます
申し訳ありません

いよいよ青エクの世界へ突入です！！

第三話 初めまして異世界

アレ 「前みたいに空から落とされずには済んだけど・・・」

ザアアアアアア ツ

アレ 「土砂降りの中、扉を学園の校門に繋げるなら、学園の中で濡れない場所に繋げて下さいよ・・・。」

?? 「貴女がアレン・ウォーカーさんですか??」

後ろから急に声がした。アレンは声の主の方へ振り返った。

アレ 「メフィスト・フェレスさん・・・ですか??」

メフィ「神に聞いたとおり知っているようですね 傘に入りなさい。風邪を引きますよ。」

アレ 「ありがとうございます。つくしゅん!」

メフィ「おやおや。理事長室で暖かいミルクティーでも飲んで温まりましょう」

メフィ「お砂糖は一つでよろしいですか?」

アレ「あ、はい。ありがとうございます。いただきます。・・・」
あゝ美味しい・・・。なんか久しぶりの和み。

メフィ「口に合いましたか?」

アレ「はい!とても美味しいです。」

メフィ「!・・・フレアさんそっくりの笑顔。アレン・ウォーカーという方になってもやはり親子ですね。」

アレ「!!!母と私を知っているんですか?!」

メフィ「もちろんです！貴女の父、藤本獅郎と私が友人なのはご存知ですよ？フレアは元は私の友人で彼に紹介したんです。つまり二人のキューピットは私なんですよ」

アレ「キューピットオ？！メフィストさんが？！」
ピエロの間違いじゃ・・・。

メフィ「ピエロではないですよ」

この人心まで読めるの？！

メフィ「声にでてました。」

アレ「すみません・・・。」

メフィ「フツ氣にしてません。フレアにもよく言われてましたから。性格までそっくりなようですね。・・・さてこれからのことを話しましょうか。ああまずこの手紙を読んでください」

アレ「手紙ですか？げっ・・・。」
神からだ・・・。面倒だなあ。まあ一応見てみよう。

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

この手紙を読んでもってことは無事にメフィストのところに着いたんだね。実は君の能力について言っていなかったことがあったんだ。アレン自身の能力、クラウン・クラウンとノアの力はその世界でも使えるよ。

臨界点突破状態のクラウン・クラウンには退魔の力があつたよね？あれを使えば人に憑りついた悪魔も抜える。つまりきつと藤本にサタンが入ってもサタン自身を倒せなくても藤本を救うことが出来るかもしれない。

大丈夫。君ならきつと未来を変えられるよ。

君に聖母

マリアの祝福あれ

）
）
）
）
）
）
）
）
）
）

アレ 「……………」

メフィ「やはりあの人は彼を利用するのですね。」

メフィストはいつもより少し悲しそうに笑って言った。

アレ「私が救います。父さんを・・・皆を・・・。」
奥村兄弟も、勝呂君達も、皆・・・。

メフィ「一人ではさせませんよ。」

アレ「え??」

メフィ「私がサポートしていきます。」

アレ「メフィストさん。」

この人がすごく頼れるイケメンに見えてきた（キラキラ

メフィ「貴女は私の義娘になるんですからww」

・・・ん？義娘？・・・ムスメ？？

アレ「義娘　　?!?!」

第三話 初めまして異世界（後書き）

この小説では獅郎生存させちゃいます
そしてメフィストすごくいい人です

次から何話か主人公と獅郎の再会編にしようと思います

第四話 アレンの決意（前書き）

やっと第四話まできました

今回はメフィストとの絡みだけです

この小説ではとにかくメフィストがいい人です

第四話 アレンの決意

メフィ「落ち着きましたか??」

アレ「なっなんとか・・・。」

こんなに取り乱したのは師匠の借金についてラビに聞かれた時以来だ・・・。

メフィ「この世界には貴女の戸籍がないんです。しかし私の義娘となればなんとかありますし、色々動きやすいはずですよ。」

なんかすごく頼りになる雰囲気かしらして 「一番は可愛い義娘が欲しかったからなんですけど」 なかったああああ!!!!??

メフィ「近いうちに上へ挨拶をしに行きましょう。貴女の実力を少し見せればある程度の地位を貰えるはずですよv vどんな顔するでしょうねw w wアハハハハハハッ」

ワオ、一気に悪魔みたいな笑顔に・・・おっと悪魔でしたv v

メフィ「決めるのは貴女です。今決められなければ時間をおいてでも「義娘になりますよ。」！・・・そんな簡単に決めてよろしいんですか??」

アレ「メフィストさんは、父と母の昔からの友達です。それに私は貴方達を元から知っていますし、直接会って信頼できる方だと思いました。これからよろしく願いしますね。お義父さんv」

メフィ「！・・・フツよろしく願いしますね。アレン。

あの、もう一度お義父さんと呼んでくれますか??（キラキラ」

アレ「そういえば、「スルーツ?!これがスルーというものなんですね?!」お父さ・・・獅郎さんには会えますか?」

メフィ「私は気にせずお父さんと呼んでいいんですよ。今の貴方にとっては二人とも父親なんですし（ニコツ）彼ならしばらく任務はありませんから、協会にいるはずです。協会までの扉の鍵、スペアを作っておきますね。」

アレ「！私は幸せ者です。二人もお父さんができた・・・。」

失くしてからずっと求めてた家族。自分が憧れてた世界。絶対守ろう・・・。そして青エグで一番好きなキャラ 勝呂君とウハウハする!!!絡みまくる!!!（実は作者も関西育ちで勝呂君が大

好きなんですv)

アレ「お義父さん!!ヴァチカン本部に行きましょう!今すぐ行きましょう!!!!」

メフィ「おや 急にどうしたんです?」

アレ「さつさと上に話をつけて動けるようにして、お父さんと再会しなきゃ何も始められない気がするから!」(ニカッ」

アレンの目は何かを覚悟したような強くまっすぐな目をしていた。

第四話 アレンの決意（後書き）

読んでくださりありがとうございます

話の内容に少しゆずぽんのことをだしました

ゆずぽんも昔のことですが勝呂君と同じで京都育ちなんです！

関西男子が大好きです

次はいよいよ親子の再会！！

第五話 再会（前書き）

主人公が両親のもとへ！

第五話 再会

メフィ「いやあ、楽しかったですね。まさか全部一撃で倒してしまうとは」

アレ「メフィストさんが悪魔を用意してるなんて予想もしてなかったです（汗）」

え？何があったかって？？私はつい1時間程前、この笑顔が悪魔なお義父さんとヴァチカン本部に行ってきたんです。しかも姿を見られないようにあつついフード付きの黒マントを被せられて連れて行ってもらったんです。そうしたら上の方達は実力で決めるとお義父さんに言っただけです。それを聞いた途端、この人・・・20匹程の中級悪魔を呼び出しやがって、その次に上級悪魔10匹を休む暇なく呼び出しやがったんです！！思わずクラウン・クラウンで握り潰しちゃいました（テヘツ）

それを見た上の方達驚きながら引いちゃってました。でも実力は認めてもらえたらしく、なんと！！！！

アレ「お母さんと同じ聖騎士の補佐官になるなんて・・・。」

メフィ「貴女の実力は上と私しか知りません。上は黒マントの貴女しか知りませんが。藤本君には」

アレ 「自分で知らせに行きます。お母さんのお墓にも知らせに行ってきます。」

メフィ「ではこの鍵をどうぞ。 　　いつてらっしゃい。」

アレ 「！いつてきます！お義父さん（ニコッ）」

鍵を差し込み扉を開けた。

メフィ「か・・・可愛いwwww今のフレーズもう一度お願いしま　　ガチャンツッ

アレンは迷わずメフィストの言葉を遮り扉を閉めた。アレンは少しうざく感じた・・・。

アレ 「ここが正十字協会か・・・。あの、すみません！」

協会の前を掃除していた協会の人にフレアの墓の場所を案内しても

らい、獅郎を呼んで来てもらうことにした。呼びに行ってもらっている間、アレンはフレアの墓を目にして手を合わせてからゆっくり話し始めた。

アレ 「はじめまして。．．．久しぶりのほうがいいのかな？お母さん、私ユズです。今は色々あってアレン・ウォーカーと言います。私つい最近この世界に帰ってきました。そして聖騎士補佐官になったんです！お母さんと同じですよ。」

ああ．．．涙出そう．．．。

アレ 「お母さん。私 「ユ．．ズか？？」！！あつ」
お父さん．．．。

獅郎 「ユズなんだろ．．？フレアにそっくりだ．．．。」

アレ 「わっ私は」 ギユウツ

獅郎に抱きしめられるアレン。

獅郎 「生きてくれたんだな．．．。もう16歳か。大きくなつたなあ．．．。」

ポタツポタポタツ

アレ「!!」

泣い・・・てるの・・・？

獅郎「生きててくれてっ本当によかったぁ、！！！」

抱きしめる力が強くなった。

アレ「っ今の私は転生してアレン・ウォーカーという存在になりました。外見だって少し変わりました・・・。それでも貴方は私のことを「娘だよ。」?!」

アレンは獅郎の顔を見た。獅郎は涙を流しながら、微笑んでいた。

獅郎「転生したって、外見が変わったって関係ねえ。お前は・・ユズは昔も今もこれからずっと俺とフレアの娘だ。俺たちのたった一人の愛しい娘だよ。」

アレ「ひつく・・・わだしが！アレンになったわだっしが！貴方を父と呼んでっいいんですか？」

涙と鼻水でぐちゃぐちゃになりながらアレンは獅郎に尋ねた。

ここに来るまでずっとどこかで考えてしまっていた。もしかしたら拒絶されるかもって……。今頃会っても迷惑かもしれない。アレンとなってしまうたのだから、ユズではないといわれてしまうかもしれないって……。でも

獅郎 「当たり前だろ！！ おかえり 。」

この人のこの笑顔を見たら自分が馬鹿だったって思って、私は思ったことを口にした。

アレ 「 ただいま！お父さん！！」

二人はフレアの墓の前で、涙を流しながら笑顔で抱きしめあった。その時かすかにおかえり、という女の人の声が二人には聞こえた気がした。

第五話 再会（後書き）

再会できて本当によかった・・・
次はメイちゃんとの再会が？！

第六話 父親の子供さを知る メイちゃん登場!! (前書き)

もう一つ小説を書き始めたので
更新がますます遅くなりそうです
時間がかかってすみません

第六話 父親の子供さを知る メイちゃん登場！！

獅郎 「そうか。お前が補佐官になるなんてなあ。フレアも喜んでるだろうな……。だが メフィストがお義父さんつつうのは許せん！！！！あいつにアレンはやらん！！！！」

うーん。なんか嫁に出すのを反対しているようだ「許すも許さないもアレンはもう私の義娘になってますし」。

アレ 「ぬおおっ！！いつから居たんですか？！」

メフィ「そうか。という所からです」

はい。つまり最初からいたんですね。あ、言い合い始まった。

「神父は一人で聖書でも読んでいなさい！！」「うるせえ！俺あれ読むの嫌いなんだよ！！お前が読めよ！」「貴方は悪魔の私に死ねと言つのですか？！」

・・・餓鬼だ。

これからが心配になり始めたアレンだった。

「クウーン。」

アレ 「？何かいるんですか？？」

獅郎 「ハアツハアツこのピンク魔人！！え？ああ昨日拾った犬だ。見るか？」

アレ 「！！メイちゃん？！」

メイ 「ユズ様！！会いたかったです！！！」

飛びついた名歌。それを抱きしめたアレン。

メイ 「あ、今はアレン様のほうが良いですね！」

アレ 「どうしてメイちゃんがこの世界に？」

メイ「実は僕悪魔だったらしいんです。」

アレ「！メイちゃんが？！！」

メイ「上級悪魔の狼牙らしくて、貴女が消えた日からずっとこの世界でお待ちしていました！」

アレ「ずっと・・・私がクラウン・クラウンに導かれた日から？
っメイちゃん！！」 ギュッ

メイ「僕はアレン様が大好きなんです。小さい頃からずっと一緒にいてくれたただ一人の御方ですから！」

アレ「メイちゃん！ありがとうっ！！これからもずっと一緒にいてくれる？」

メイ「僕は貴女の使い魔となつてずっと一緒にいます！！昔貴女に助けられた分、これからは僕がお守りします！！」

アレ「ありがとうっ！これからもよろしくね！！」

メフィ「・・・あのすみません。そろそろ私達も会話に混ぜてもらいたいですか?？」

獅郎「アレンの犬だったのか?？」

・・・うん。二人のことすっかり忘れてました

獅郎「そうか・・・。名歌!これからも娘を頼むな!！」

メイ「わんっ!！」お任せ下さい!獅郎様!！」

メフィ「契約はすでに終えているんですね?」

アレ「昔から一緒に居たので、いつの間にか契約していたみたいです。!そういうはお義父さんはなんでここにいます?？」

メフィ「私としたことが忘れてました。お二人に任務です 親子で初の任務ですよ。」

獅郎 「げっ！もう少し休みたかった……。今からいけるか？アレン。」

アレ 「はい！メイちゃん！行きますよ。」

メイ 「はい！アレン様！」

アレ 「ではお義父さん！行ってきます。」

メフィ 「いつてらっしゃい」

こうしてアレンは獅郎と名歌と共に任務へ向かった。

学園へ帰るとメフィストと獅郎がどっちが父親にふさわしいか、という言い合いを3時間もしてアレンをキレさせたことは名歌しか知らない。

第六話 父親の子供さを知る メイちゃん登場!! (後書き)

次はアマイモンとの絡みです
アマイモン可愛すぎるww

第七話 いつの間にか使い魔に。そして義娘の反抗期？

メフィ「アマイモン・・・何故ここで私のアレンとお茶してるんです？！」

アマイ「兄上お帰りなさい。お菓子美味しいですよ。」

アレ「それ答えになってないですよ。っていうか私のつていうのやめてください。なんかうざいです。「ひどいっ！」「実はお菓子を食ベにきたら部屋の真ん中で倒れてたんですよ。しかもお腹の空きすぎで。」

アマイ「アレンが沢山くれたんです。アレンとお話ししながら食べてました。」

メフィ「なんか仲良く見えますよ。」

「「仲良しになったんですよ。」」

メフィ「わっ私がない間にそんな仲良くなっているなんて・・・

ずるいですよ!!（泣）」

アマイ「兄さん。うざいです。ね？アレン。」

アレ「アモンの言うとおりです。メフィストさん。」

メフィ「!!おっお義父さんと呼んでくれないんですか?！」

アレ「最近呼ぶ価値があるか分からなくなっているんです。まあ反抗期だと思つといてください。」

メフィ「そんな……。」

部屋の端でいじけ始めたメフィスト。

1時間後

アマイ「そろそろ帰りますね。兄さんもいいかげんいじけるのやめてくださいね。」

アレ 「また今度呼びますね。お義父さんもう立ち直ってください。」

メフィ「お義父さんと呼んでくれましたね！アマイモン、早く帰りなさい！シッシッ！」

追い払うようにするメフィスト。

「……ハア。」

アマイ「アレン。契約に関係なく遊びに来てもいいですか？」

アレ 「もちろん！使い魔の前にアモンは友達ですから。」

アマイ「ありがとうございます。それじゃあ。」

アマイモンはベヒモスを連れて帰って行った。

メフィ「アッアレン。今の話を聞いてるとまるでアレンがアマイモンの……。」

アレ「アモンはさっき僕の使い魔になりましたよ？メフィストさんがいいじいじしてる間に。」

メフィ「なんですってー？！！」

すごいカマッぽい・・・。

メフィ「それより！またメフィストさんになってますよ！！！」

アレ「え？？わざとですよ」

メフィ「・・・いやですうう！！お義父さんがいいですうう！！！！（泣）」

アレンはこうしてメフィストがいいじけている間にアマイモンを使い魔にしてしまった。だがそれよりもいいじし始めたメフィストの相手をするこの面倒くさを思い知ったアレンだった。

第七話 いつの間にか使い魔に。そして義娘の反抗期？（後書き）

＊メフィストがいじけてる間＊

アマ アレンとは話があります。

アレ そうですね！こんなに食べ物の話で通じ合える人全くなかったので嬉しいです！

アマ そうだ。僕をアレンの使い魔にしてください。

アレ え？！

アマ アレンの事気に入りました。それにアレンがしようとしてること僕もお手伝いしたです。

アレ （何この子ー！ちょーいい子なんですけどー！！）いいんですか？僕なんかで。

アマ アレンじゃなきゃ言いません。ベヒモスもアレンが気に入ってます。

アレ ……わかりました。僕と契約してくれますか？

アマ もちろんです。ところで兄上はどうします？

アレ うーん。アモンが帰るころに声かければいいですよ。

アマ そうですね。あ、そういえばこの間バクダン焼きを食べました。

アレ バクダン焼き?!それはどんな食べ物なんですか?!(キラキラ)

ことでした。

という

第八話 原作突入！ 嗤う青閻魔と白の道化師（前書き）

やっと原作入りです

1巻の最初から頑張ろうと思います！

第八話 原作突入！ 嗤う青閻魔と白の道化師

アレンは名歌に乗り、急いでいた。名歌もとにかく早く走っていた。二人の表情は必死そうどこか焦っていた。その理由はアマイモンが朝早く尋ねてきて知らせてくれた内容が原因だった。

父上が物質界に行くと言っていました。もしかしてアレンが言っていたあの日って今日なんじゃないですか？？

アレ 「よりによって任務がある時にっ！」

* 燐 s i d e *

獅郎 「物質界に存在しながらにして・・・虚無界の神であるこのオレの“炎”をひく・・・！！お前は物質界を手に入れる為に不可欠だ！！」

燐 「うあああ！！！！助けてくれ・・・！！」

俺、このまま・・・死ぬのか？ジジイもこのままじゃ・・・！

?? 「クラウン・クラウン。」

燐の目の前に、白いマントをまとった仮面をつけた者が現れた。男か女かも分からない。

獅郎 「！！何もんだあ？」

?? 「ただのエクソシストです。その人の身体返してもらいますよ？ サタン。」

ザシュッ！！

獅郎 「ぐあああああ！！ぎゃあああ！！てめえ何しやがったああ、！！」

燐 「！！ジジイ！！お前！！ッ！！」

首に痛みを感じた燐。

こい・・・っ・・・。

?? 「しばらく眠っていて・・・。今だ・・・や・・・らか・・・。
」

なんて言って・・・る・・・ん・・・だ？

* 燐 side* \ fin \

メイ 「アレン様！」

アレ 「燐君を向こうへ運んでください！もうすぐお義父さんが来るはずです！」

メイ 「分かりました！！！」

獅郎 「力が抜けていく！！何故だ！！！！こいつは死んでいないのに！！！」

アレ 「僕のこの剣、クラウン・クラウンには退魔の力があります。だから切っても人は切れないんです。 虚無界に帰りなさい。」

サタン！」

ザシユツ！！！！

獅郎 「あゝ あああああゝ！！クソがあっ！！！！」

ドサッ

アレ 「お父さん！！」

獅郎 「・・・・・・はあっ・・・・・・はあっ・・・・・・」

息がある・・・・。間に合ったんだ・・・・！

アレ 「よかった・・・・。間に合って本当につ。」

メフィ「アレん！！彼は無事ですか？！」

アレ 「息はありますが危険な状態です！！急いで治療しないと！」

メフィ「扉を開けます。彼は名歌に運んでもらいましょう。」

アレ 「メイちゃん。頼んでいいですか??」

メイ 「もちろんです！お任せください！」

ピッ・・・ピッ・・・ピッ・・・

理事長室の棚の奥。いわゆる隠し部屋に三人はいた。部屋は真っ白で真ん中には呼吸器を付けた獅郎がベッドにいた。アレンはベッドの横にある椅子に座り、獅郎の手をにぎっている。それをちょっと？羨ましそうに後ろから見るメフィストは、咳払いを一回してアレンに話しかけた。

メフィ 「もう命に別状はありませんが、いつ目が覚めるかは分からないそうです。」

アレ 「そうですか・・・。でも生きててくれるならそれでいいです・・・。」

メフィ 「彼が生きていることは私と貴女と彼を診せた医者と使い魔達だけです・・・奥村兄弟には言わないんですか??」

アレ 「まだ言いません。二人にはこれから沢山の試練がまっています。特に燐君には。だから少しの覚悟では駄目なんです。」

メフィ「藤本君の死。彼らには大きなものです。」

アレ 「ええ。だから、お父さんの死は彼らに強い覚悟をさせたはずです。それに決意も……。」

メフィ「決意、ですか。」

アレ 「雪男君には燐君を守るという決意。今は燐君がお父さんを殺したっていう想いもあって混乱してるかもしれませんが。でも大丈夫です。それに燐君はサタンを倒すこと。そして 僕を見つける事。」

メフィ「!!!?」

アレ 「僕は彼の目の前でお父さんをクラウン・クラウンで切り付けました。きっと彼は僕とサタンが殺したと思っているはずです。」

メフィ「アレン……。自ら憎まれ役になるなんて馬鹿ですね。」

アレ「うるさいですよ、メフィストさん」

メフィ「もうパパとは呼んではくれないのですかあ?!」

アレ「誰もパパだなんて言ったことないですよ それより、燐君を迎えに行ってくださいよ。僕は本部に行つて来ないといけないのに。」

メフィ「おや? 任務なんて入ってましたっけ??」

アレ「次の聖騎士を決めているらしいんです。だから補佐官を辞めに行くんです。僕が補佐したいのはお父さんだけですから(ニコッ)」

メフィ「! そうですか。・・・それより、もう一度笑ってください!!」今の笑顔は写真に収めておくべきだ!!!「早く迎えに行け(黒笑)」ハイ!!(汗)」

お父さん。僕は貴方が目を覚ますと信じてます。だからそれまで僕が守ります。それが補佐であり、娘である僕の役目だと思うから。

第九話 兄と弟 燐の決意！（前書き）

第八話から原作に入りました
原作の内容に入っている話は、タイトルに原作のタイトルを使っ
てます！

はい。どーでもいいですね。

ここまで読んでくださっている方に感謝です

第九話 兄と弟 燐の決意！

＊ 燐 S i d e ＊

なんなんだよ。大人しく殺されるか、自殺の二択だと？冗談じゃねえ！！

燐 「仲間にしろ！」

メフィ「?!！」

燐 「お前らがどう言おうが……。俺はサタンとか……。あんな奴の息子じゃねえ！！俺の親父は……」

俺と雪男を育ててくれたのは……。俺をいつも庇ってくれたのは……。俺をいつも心配してくれたのは……。俺を息子だって、笑って言ってくれんのは……

燐 「ジジイだけだ……！」

メフィ「被魔師になって……。どうするんです?。」

燐 「サタンをぶん殴る!!!」

メフィ「フツ フフハ！ウハハハハハ！グハハハハ！これはいい・・・！ヤバイ 久々にきました！ハハハハハハ！」

燐 「何がおかしいんだよ！つかテメーの格好のほうがよくばどおかしい」「これは私の正装です！」

メフィ「しかし、正気とは思えん！」

燐 「正気だ!!」

メフィ「ククク・・・サタンの息子が被魔師・・・!!」 面白
い！いいでしょう！

「ちょ！？フェレス卿！」

燐 「えっいいのか!？」

メフィ「但し貴方が選んだ道は荊の道。それでも進むとおっしゃるのならば。」

燐 「・・・俺はもう人間でも悪魔でもない。・・・だつたら被魔師になつてやる!!」

★燐 side★fin★

メフィ「お待たせいたしました どうでしたか？入学式は。弟さんが新入生代hy「被魔師にはどうやってなるんだ？」貴方まで私の言葉を遮るのですね・・・ぐすん。・・・まあやる気満々で結構ですが、まずは塾に通つていただきます。」

燐 「塾!？」

メフィ「はい。そこでまずは被^{ペイジ}魔訓練生として悪魔^{エクソシズム}被いを学んでいただく。塾は今日が初日です。案内しましょう。ただし!一つ警告です!貴方がサタンの落胤である事は秘密です。尻尾を上手く隠し、耳や歯なども誤魔化せられても炎はシャレにならない。自制してください。」

燐 「・・・・・・・・努力するよ。」

メフィ「…………結構です。では参りましょう
ポンッ

アインスツヴァイドライ
1・2・3
」

燐「いつ犬うー?!可愛い…………。」

アレンと名歌はというと、本部からの帰り道。列車の中で眠っていた。

メイ「アレン様!もうすぐ学園に着きますよ。」

アレ「ふわぁ。ありがとうメイちゃん。久しぶりに列車に乗りましたが、寝てしまいましたね。景色を見たりすればよかった。」

メイ「仕方ありません。上の奴らがなかなか辞めることを認めず、夜中も寝ずに話していたんですから。」

アレ「結局、復帰する気になったら連絡するってことでOKもらえましたが…………。」

なんか面倒ですね。それよりお義父さんは上手くやったのでしようか…………。とてつもなく不安です。

アレンが列車の中で不安がっている頃、塾の教室では……。

雪男 「大人しく騎士本部に出頭するかいつそ 死んでくれ。」

燐 「……なんだと……。お前……！ジジイが死んだのは……まさか……。俺のせいって思ってたのか……！」

……アレンの不安は見事的中していたのでした。その日の夜、理事長室から叫び声と必死な謝罪が聞こえたかどうかは、またまた名歌しか知らない。

第十話 食い散らかしとトサカ頭の出会い（前書き）

自分で改めて読んでうーん・・・って感じだったので、書き直しちゃいました。

二人の出会いはなんか難しい・・・。

第十話 食い散らかしとトサカ頭の出会い

アレ 「・・・^{リバー}蝦蟇を怯えさせるとは思いませんでした。」

何かあった時のために張っていましたが、雪男君もいるようでしたし監視はいいみたいですな。

アレ 「さて。僕も準備しようかな。」

* 竜士 s i d e *

竜士 「・・・なんで廊下にたこ焼きが落ちとるんや。しかもその先には焼きそばパン？」

落ちている食べ物を追っていく。すると先のほうでズルッズルッと何かを引きずる音がした。

悪魔か・・・?!

竜士 「・・・・・・・・・・は??」

アレ 「?ふおへ??もぐもぐ」

そこには食べ物があふれるくらい入った袋を引きずりながら、サン
ドイッチを食べている女がいた。

竜士 「お前何しとるんや・・・。」

侵入者か？もしかして悪魔なんか？？

アレ 「食事ですけど？」

その女とはアレンだった。

竜士 「んなもん見たら分かるわ！！俺が聞きたいんはなんでそんなに袋に食べ物突っ込んで引きずりながら歩きまわっとるんかいことや！！お前が通ってきたところみてみい！たこ焼きやらシュークリームやら落ちすぎや！！しかも納豆巻きは匂いすぎやねん！！どーにかせい！！！！はぁ・・・はぁ・・・」

一気に言った竜士は酸欠気味になり、言われたアレンは目を大きく見開いたまま固まっていた。

アレ 「・・・そうですね。ご迷惑おかけしました。（ペコリッ）でもまさか落としてきてるとは、まったく気づきませんでした。」

竜士 「そんな入れとつたら落ちるに決まつとるやろ・・・。」

アレ 「・・・そうですね（笑）片づけておきます。注意してください。ありがとうございます。それでは、また。」

竜士 「？また会つかわからんやろ。見覚えなし、ここの学生とちゃうんやろ？？」

アレ 「貴方とはまた会える気がするんです。」ズルツ・・・ズルツ

竜士 「美人やけど、不思議な奴やな。・・・！おい！！言ったそばからフランスパン落とすなや！！！」

・・・今度会つたら名前聞くか。

竜士もどこかでまた会えるのではと考えていた。でもまさか塾で会うことになるとは思ってもしなかった。

* 竜士 s i d e * ~ f i n ~

翌日、散らかっていた廊下はシミ一つなかった。そして竜士以外にも落ちてる食べ物を見た人間が結構いたらしく、学校の七不思議と

なった。そしてアレンが理事長室に行ったとき、メフィストとその使い魔がやつれていた事にアレンは気づかぬふりをした。

第十話 食い散らかしとトサカ頭の出会い（後書き）

アモ アレ〜ン。来ちゃいましたあ。

アレ アモン！お久しぶりですね。今日はどうしたんです？

アモ 遊びに来たんです。お土産にバクダン焼きを持ってきました！。

アレ ！！ホントですか？！さっそく食べましょう！

二人 いただきます。もぐもぐっ

アレ おっ美味しい（キラキラ）

アモ もぐもぐっ名歌も食べますか？

メイ いいの？ありがとう！もぐもぐ。！美味しい！！

アレ メイちゃんとアモンって意外に仲いいですね。もぐもぐ

アモ 使い魔同士ですから。たまに兄上についての愚痴を聞いてもらっています。もぐもぐ

アレ そうなんですか……。メイちゃん！！僕の話聞いてくれますか？！もぐもぐっ

メイ・・・聞きますから、もう少しゆっくり食べても……。。

二人 メイちゃん！／名歌。食事は弱肉強食なんですよ！

メイ そっそうですね（汗）

第十一話 奥村兄弟との出会い

アレ 「こんな朝早くから何かようですか？」

メフィ 「なんか冷たくないですか？コホンッ実は奥村兄弟に君を紹介しようと思ひまして。階は違ひますが、一応同じ旧男子寮に住んでるんですし。」

アレ 「それに塾にも通ひますしね。」

コンコンッ 「どうぞ。」 ガチャッ

雪男 「理事長。何か御用ですか？ そちらは・・・。」

燐 「どうしたんだ？雪男。 ？誰だそいつ？？」

メフィ 「今日は彼女を紹介するために呼んだんです。アレン。」

アレ 「アレン・ウォーカーです。アレンと呼んでください。」

メフィ「彼女は事情がありまして入学式に間に合わなかったんですが、塾に通う事になっています。」

雪男「そうなんですか。奥村雪男です。悪魔薬学の講師をしています。授業の時は先生でお願いします。」

燐「俺は奥村燐！俺も塾に通ってんだ！よろしくなアレン！」

アレ「よろしくおねがいます！」

メフィ「いやあ。アレンに友達が増えてよかったです。パパは心配で心配で……。」

・
・
・
・
・
・
は
？
？

「「パパあー？！」「」

燐「むっ娘なのか？！こいつの？！」「ビシッ

メフィ「指ささないでください。」

アレ 「義理の娘ですよ。義理の。」

燐 義理を2回言っただぞ。

雪 強調したね。2回言っただぞ。

メフィ「それと階は違いますが、アレンも旧男子寮に昨日から住んでいますので近所同士としても仲良くしてくださいね。」

燐 「お前もあそこに住んでんのか?!」

アレ 「そうですよ。ああ、食費は2000円ではありませんけど(ニコ)普通生きていけませんし、貯めておいたバイト代があるんです。」

「この間ちょっと絡んできた奴らとポーカーをしてがっばりと(黒笑)」

雪男 「(・・・アレンさんが黒くなった・・・)でっではもうすぐ授業も始まりますし、行きましようか。」

アレ 「はい!ではいつてきます。」

メフィ「いつてらっしゃい。」

燐 「アレンはなんで入学式に出られなかったんだ?？」

雪男 「兄さん。アレンさんにも事情があるんだから。」

アレ 「いいんですよ。詳しくはあの義父関係ですかね?そうだ。
燐はなんで被魔師になりたいんですか?」

燐 「なんだよ急に。」

アレ 「いえ、同じ場所で学ぶ仲間ですし色々知りたいなって。」

燐 「ふーん。俺はな!サタンをぶっ飛ばすんだ。」

アレ 「いい目標ですね。」

雪男 「笑ったりしないんですか？」「なっ雪男！！」聞いた人は大
体爆笑ですよ？」

アレ 「僕もそんな感じですし。」

燐 「そうなのか？！あっあのさ、白いマント着てて仮面付けた
奴みたことねえ？」

ドキッ

アレ 「さあ。その人がどうかしたんですか？？」

雪男 「兄がいうには、僕らの義父が死んだとき居たらしいんです。
」

燐 「アイツジジイを剣で切りやがったんだ。でもなんかサタン
みてえな嫌な感じはなかった。だから会ってジジイを切った理由を
聞きてえんだ。」

アレ 「・・・そうなんですか。」

その探している者がここに居ると知った時、貴方はどうするんで
しょうか……。まあ、まず殴られそうな気がします。

雪男 「呼ぶまでここで待っていてもらえますか？」

アレ 「あっはい。」

燐 「あとでな！アレん！！」

アレ 「はい。」

・・・お父さん。貴方がいつ目覚めるかはわからないけど、守ろうと思っていたモノは僕が守ります。そしてこの生徒も・・・皆守ります。エクソシストは破壊者かもしれないけど、ユズは救済者でもありたい。

雪男 「では、どうぞ。」

アレ 「はい。」

アレんは目の前の扉を開けた。

第十一話 奥村兄弟との出会い（後書き）

メフ ああーアレンは大丈夫でしょうか。もう挨拶をしたのでしょうか。クラスの子とは話せているのでしょうか・・・あああ！！アレエェン！！

アマ・・・名歌。兄上を何とかしてください。

メイ 無理ですよ。あの状態のメフィスト様はアレン様以外にはなんとできません。ほっとけばいつかは治まります。

アマ いつですか？？

メイ・・・。。。

アマ・・・。。。

二人・・・。。。

早く帰ってきてください。アレン／アレン様。

第十二話 自己紹介と友達

ドアの向こうには雪男を含め10人ほどの人がいた。

目の前には教壇の前に立っている雪男が微笑んで待っていた。生徒側には隣がキラキラした目で一番の前の席から視線を送っていた。そして後ろの方には驚いた顔をしたトサカ頭がいた。アレンは思わずクスツと笑った。

アレ 「アレン・ウォーカーです。アレンと呼んでください（ニコツ）」

?? 「坊！あの子美人さんやぁww」

竜士 「耳元で叫ぶなや。志摩。」

アレ 「また会えましたね。僕の言った通りだったでしょう？」

竜士 「ほんまやな。」

雪男 「アレンさん。勝呂君と知り合いのようですね。じゃあ席は勝呂君の隣でいいですか？」

アレ 「はい。」

二人は改めて自己紹介をした。そしてすぐ授業が始まった。

アレ 「えっと、竜士。教科書見せてもらってもいいですか？」

竜士 「ああ。ええで。まだもらってないんか？？」

アレ 「ええ。ちょっとした手違いで3日後には届きます。」

お義父さんが自分の漫画と一緒に売っちゃったんです。だなんて
言えない……。

先生 「では、ウォーカーさん。ここの第1章を暗唱してもらえますか？」

アレ 「あっはい。太初^{はつめ}に言^いありき。」

アレンは唄のようにすらすらと言葉にしていた。周りはスラスラと暗唱する転入生に驚きを隠せなかった。もちろん、隣の席の竜士

もだ。しかし竜士の場合、張り合える人間が現れたという嬉しさもあった。

アレ 「ゝ。」 これでいいですか？

先生 「よくできました！！」

?? 「アレンちゃんって頭ええのん?!めっちゃすらすらやったやん!!」

アレ 「えつと貴方は・・・」

竜士 「こいつは志摩廉造。そっちが三輪子猫丸や。」

アレ 「志摩君と三輪君・・・。」

子猫 「気軽に子猫丸でええですよ。」

アレ 「じゃあ僕もアレンでいいですよ。」

志摩 「僕もれんぞ 「志摩は志摩でええ。」ちよつ、坊なん
で遮るん?!」

アレ 「分かりました。志摩って呼びますね（ニコッ）」

志摩 「かわええからOKですわ（デレ〜）」

燐 「うわ、志摩の顔気持ち悪い。」

志摩 「ちよつ奥村君それひどない?!」

燐 「ははっ悪い!しえみ。隠れてねえで出てこい!」

しえ 「きゃっ!・・・あ・・・あのアレンちゃん!わわわわたっ私
と、おっお友達になつてください!」

アレ 「・・・・・・。」

少し驚いた顔をしたまま固まったアレン。
周りは「?」のような顔をしてアレンを見た。

竜士 「?どないした。アレン！」

アレ 「!あ、すみません。その・女子に友達になってと言われるの初めてだったので、驚いてしまって・・・。」

志摩 「ええ?!そうなん?!！」

アレ 「僕、髪と呪これいがあるので恐がられてて・・・。同じ年の友達皆が初めてです!僕で良かったら是非友達になってください!」

しえ 「やったあ!あ、私は杜山しえみ!しえみって呼んで!よろしくアレンちゃん!!」

アレ 「よろしく!しえみ。」

燐 「なあアレンのその目の周りのって刺青なのか?なんかかっこいいぞ。」

アレ 「!クスッ!かっこいいですか?燐は面白いですね。」

竜士 「いや、俺もアレンにあってると思うで。その銀髪も綺麗やし。」

アレ 「きつ綺麗・・・／＼ありがとうございます！／＼／」

志摩 子猫さん。坊が女の子褒める所、僕初めて見ましたわ。坊つてもしかして・・・。

子猫 僕も初めてや。本人は気づいてはらへんけど多分・・・。

二人 惚れとるんやろうなあ。

アレ 「へ？称号マイスターですか？？もう決めてますよ。」

しえ 「そうなの？！アレンは何を取るの！？」

アレ 「僕は騎士ナイト・手騎士テイマー・詠唱騎士アリアですよ。」

しえ 「3つも取るの？！」

しえみの驚いた声に驚いた4人が集まってきた。

子猫 「アレンさん、3つも取らはるんですか？」

アレ 「ええ。暗唱は得意な方ですし、剣を使って戦う時もありますから最初は2つにしようと思ってたんですけど。使い魔テイマーが居るので手騎士も取ろうと思ひまして。」

竜士 「使い魔おるんか?!」

アレ 「はい。2匹居るんですけど可愛いですよ。」

しえ 「私もほしいなあ。お友達になりたい。」

アレ 「しえみはすぐに召喚できますよ!才能あると思います。」

しえ 「そう言ってもらえると嬉しいなあ。」

雪男 「皆さん。次は魔法円・印章術の授業じゃないんですか?移動する時間なくなりますよ?」

志摩 「ホンマや！急がな！！」

6人は教室から全速力で移動した。
その中で妙に志摩だけが息切れをしていた。

第十二話 自己紹介と友達（後書き）

＊移動中＊

アレ しえみ、もうすぐ着きますよ。

しえ ごめんねアレんちゃん！！私を抱えて走らせちゃって・・・。
アレ 着物ですし走れないのは仕方ありません。それにしえみは軽いのでまったく問題ありませんよ。

しえ ありがとうございます！

志摩 はあっはあっ！アレんちゃんなんでそない早く走って息切れしてへんの？！

子猫 志摩さん。僕なんかバテて坊におぶってもろてますよ。

勝呂 俺は朝走って鍛え取るからこのくらいは楽勝や。

燐 俺も余裕だぞ。志摩、おぶってやろつか？？

志摩 えっ遠慮しますわ・・・。

第十三話 友千鳥（前書き）

今回のテストは範囲が広くて頑張っていました！
更新が遅くなってしまうすみません。

第十三話 友千鳥

魔法円・印章術の授業

ネイ「図を踏むな。魔法円が破綻すると効果は無効になる。」

あれがネイガウス先生ですか……。たしか召喚するのは屍番犬ナベリウスだったかな……。あれ嫌いなんですよね。臭いし、グロテスクすぎです。

竜士「アレン。どないした？ぼーっとして。」

アレ「！少し考え事を……。あれ？しえみと神木さんは出来たんですね。」

竜士「俺らは出来なかった。」

アレ「うん、予想通りですね。」

竜士「どういう意味やー!!」

志摩「アレンちゃんの使い魔みたいわぁ!!」

燐「俺もー!!!」

アレ「じゃあ一匹だけ。“時の破壊者の名において哀れな魂を救いたまえ。”」

ヒュウツと風が吹きながら現れたのは子犬の姿の名歌。

メイ「くうー。」

しえ「可愛い／＼／!!」

ネイ「狼牙の子供か？凄じくないか。そいつらはなかなか使い魔には出来ん。」

子猫「触ってええですか？」

アレ「メイちゃんは大人しい子ですから大丈夫ですよ。」

しえ「この子メイちゃんっていつの？」

アレ「本当は名歌といひます。呼ぶのはどちらでもいいですよ。」

出雲「ねえ。・・・その」

朴「頑張れ出雲ちゃん。」

出雲「・・・触ってもいい？」

アレ「！はい）ニコッ（あっアレンって呼んでください。」

朴「私も朴でいいよ。よろしくアレンちゃん。」

出雲「出雲でいいわよ。・・・アレン。」

アレ「よろしくおねがひします。」

しえ「（アレンちゃんすごい・・・。私もお友達にー！）（」

メイ「わう〜ん……。　（アレン様……。僕を忘れないでください！泣）」

雪男「……。はい終了。プリントを裏にして回してください。」

燐「ちょ……。ちょっとボク夜風にあたってくる。」

竜士「おう、ひやしてこい……。　」

出雲「朴！アレンも！お風呂入りにいこっ！」

朴「うん……。　」

しえ「お風呂！私も！」

志摩「うはは女子風呂かwwええな。こら覗いとかなあかんのやないんですかね！合宿ってそういうお楽しみ付きもんでしょ。」

竜士「志摩！！お前仮にも坊主やろ！」

子猫「また志摩さんの悪い癖や。」

志摩「そんなん言つて二人とも興味あるくせに。」

雪男「一応ここに教師がいることをお忘れなく。」

「「「・・・・・・。」」」

志摩「教師いうたってアンタ結局高1やろ？無理しなさんなつて。」

雪男「僕は無謀な冒険はしない主義なんで。それともう一人忘れてますよ？」

志摩「へ？先生の言つとおりです。」・・・あ、ああアレンちゃん・・・・。」

アレ「僕がいるのもお忘れなく。そうそう最近テレビをみて面白い技を覚えたんです。試していいですか？」

志摩「えつとー」「やってええ。俺が許可するわ。」坊　　！！何をいつてますの？！！「いつきまーす。おりや。」ぎいやあああああー！！「いだだだだー！！ギブです！！あかん！！ギブ！！」

子猫「綺麗な逆エビですねえ。」

雪男「テレビで見ただけで出来るなんて・・・。」

志摩「ちよつ助けてえや！！！！」

「きゃあああああー！！！！」

「「「「「！！！！」」」」」

アレ「しえみ！無事ですか？！」

しえ「うっうん！」

アレ「よかった。朴さんも大丈夫そうですね。」

朴「杜山さんの・・・おかげ・・・。」

読んだから知っていたとしてもやっぱり不安にはなりますね。・
・一度父さんを助けて話を変えてしまったわけですし、何か起こる
かもしれない・・・。」

竜士「アレン、ぼけつとせんとはよ行くで。」

アレ「あっはい!」

ネイ「何を啼く。・・・いや悪魔の犬に成り下がったこの被^{オレ}魔師を
嗤っているのか。」

一度ずれた時の流れは止まることはできない。戻ることもできない。
この一つのずれが未来にどう影響してくるか、まだ誰も知らない。

第十三話 友千鳥（後書き）

雪 兄さん、なぜ裸に・・・。

し / / / /

燐 ……なりゆきで……。 （早く行け……。 ）

志 アレンちゃんの逆エビの刑やな！

ア いえ、あれは志摩専用技にしたので

志 なにそれー！！？ まって！ 逆エビ以外にもあるん？！！

ア レパートリーは豊富ですよv

竜 そりゃ楽しみやなあ、志摩。

志 楽しみなは坊だけやろ？！！！！

雪 僕も楽しみです（ニコ）

子 僕もまたあの綺麗な逆エビみたいですわ。

ア じゃあ今からでも

志 もう嫌やああああ！！！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8098w/>

え・・・？ 祓魔師って？

2011年10月24日17時08分発行